

〔原著〕

同性友人関係尺度・異性友人関係尺度の作成と その信頼性・妥当性の検討

筑波大学人間総合科学研究科：水野 雅之
筑波大学心理学系：佐藤 純

Development and validation of the same-sex friendship scale
and the opposite-sex friendship scale

Masashi Mizuno and Jun Sato

問題と目的

青年は青年期前期に親からの心理的離乳が生じ、友人との相互依存関係を通して、親との間に最適な心理的距離を見出し、独自の価値観、信念、理想などを確立していく（遠藤，1999）。また、松井（1990）は児童や青年の社会化に対して友人は多側面にわたる影響を及ぼしており、青年の社会化における友人の機能には安定化の機能、社会的スキルの学習機能、モデル機能があるとした。このように青年期において友人との関わりは青年の健康な発達に不可欠であるといえよう。

落合・竹中（2005）は1985年以降の青年期の友人関係研究を概観し、それらを友人関係の構造に関する研究、友人関係の構造と様々な要因との関連研究、友人関係の発達の变化に関する研究に整理した。その中の友人関係の構造に関する研究では、その構造を捉えるための尺度が多数作成されており、その構造と様々な要因を検討する際の基礎的な研究と考えられる。

たとえば、岡田（1993）は、最も親しい友人を想定した上で友人関係様式について回答してもらい、クラスター分析の結果から集団志向性が高い「群れ志向群」、対人関係の深まりを避ける「群れ志向群」、深い情緒的関わりを持つとうとする傾向が強い「やさしさ志向群」を見出した。岡田（1995）でもほぼ同様の結果が示さ

れている。

また落合・佐藤（1996）は、友達とのつきあい方に関して収集した項目から因子分析によって「本音を出さない自己防衛的なつきあい方」、「誰とでも仲良くしていきたいというつきあい方」、「自分に自信をもって交友する自立したつきあい方」、「自己開示積極的に相互理解するつきあい方」、「みんなと同じようにしようとするつきあい方」、「みんなから好かれることを願っているつきあい方」の6因子を抽出し、二次因子分析の結果から「人とのかかわり方に関する姿勢」という「深い-浅い」の次元と「自分がかかわろうとする相手の範囲」という「広い-狭い」の次元を見出した。二次因子分析で抽出されたこれらの二次元は小塩（1998）の友人関係の構造に関する研究における二次因子分析の結果においても同様の二次元が抽出されている。

さらに長沼・落合（1998）は同性の友達とのつきあい方を因子分析の結果から16因子抽出し、二次因子分析の結果から「友達とのつきあいの深さ」と「相手との心理的接近の仕方」の高次因子を見出している。

しかしながら、これらの従来の友人関係の構造に関する研究では、同性の友人関係（たとえば、落合・佐藤，1996；長沼・落合，1998）や友人の性別を分けずに友人関係（たとえば、岡田，1993，1995，1999；小塩，1998）に着目し

ており、異性の友人関係の構造を検討したものは存在しない。

しかし、新見・松尾・前田(2004)は大学生を対象に、自己表明と他者の表明を望む気持ちを相手の友人の性別ごとに男女別に検討し、性別や相手の友人の性別によって自己表明と他者の表明を望む気持ちが異なることを示した。

したがって、同性の友人との友人関係と異性の友人との友人関係は質的に異なる可能性があるが、その構造については未検討のままとなっている。すなわち、異性の友人関係の構造と様々な要因との関連についても検討されていないのが現状である。

また、従来の友人関係の構造を測定する尺度はいずれも信頼性と妥当性の検討が不十分であるという問題が存在する。

以上の議論をふまえ、本研究では同性の友人関係の構造と異性の友人関係の構造に着目し、それぞれを独立に測定する尺度を作成する。その上で、作成した尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

方 法

調査期間

2009年7月下旬。

調査対象

神奈川県内の私立大学生153名(男性:74名・女性79名)。平均年齢18.75歳($SD = 1.14$)。

調査方法

個別記入方式の質問紙調査を講義時間内に集合形式で実施した。

調査内容

- (1) 学部, 学年, 年齢, 性別
- (2) 同性友人関係尺度・異性友人関係尺度

岡田(1993, 1995)や落合・佐藤(1996)、小塩(1998)の尺度と自由記述アンケートの結果を参考に、新たに30項目を作成した。それぞれ同性と異性の友人ごとに「よくあてはまる(5)」から「まったくあてはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。同性友人関係尺度、異性友人関係尺度とも同一の項目から構成されてい

る。

- (3) 特性シャイネス尺度(相川, 1991)

特定の場面を超えた個人特性としての内気や引っ込み思案の程度を測る1因子性の高い尺度である。16項目について「よくあてはまる(5)」から「まったくあてはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。

- (4) 親和動機尺度(杉浦, 2000)

他者と友好的になりそれを維持しようとする欲求である「親和動機」の2つの側面である、分離不安から人と一緒に居たいという気持ちを表す「親和傾向」と他者からの拒否に対する恐れを要素を持つ「拒否不安」を下位尺度にもつ18項目からなる尺度である。「あてはまる(5)」から「あてはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。

結 果

1. 同性友人関係尺度

(1) 因子分析

回答の偏り(平均値 $\pm 1SD$)を示す天井効果・床効果がみられず、項目全体相関が.30以上の12項目に対して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況と解釈可能性から2因子を採択し、因子負荷量が.35以上の項目で二重寄与していないものを手掛かりとして各因子を解釈した。分析の際には男女別に分析した場合も抽出される因子や各因子に対して負荷量の高い項目は男女いずれも男女を込みにした分析の結果とほぼ同じであったため、男女を分けずに分析を行った。結果をTable 1に示す。

第1因子には項目37(友人には自分の心を打ち明ける)や項目59(私は他の人よりも深く友人と付き合ってる方である)など、友人関係の深さに関する項目が高く寄与しており、友人関係において相手とより親密である、親密になろうとする項目であると考えられるため友人関係の「関係深化」の因子と命名した。第2因子には項目55(初対面の人ともすぐに仲良くなれる)や項目31(一度でも会ったことがある人は

誰でも友人である) など、色々な人と友人になろうとする項目が高く寄与しているため、友人関係の「関係拡大」の因子と命名した。2 因子間の相関は.31であった。

(2) 信頼性の検討

下位尺度ごとに得点の平均値を求め下位尺度得点とした。各下位尺度のクロンバックの α 係数を Table 1 に示す。いずれの下位尺度においても、 $\alpha = .72, .84$ と高い内的整合性が認められ、本尺度は十分な信頼性を備えていることが示された。

(3) 本尺度の基本統計量と性差に関する検討

本尺度の下位因子得点に関する基本統計量と

t 検定による男女差の検討を Table 2 に示す。

両側検定による t 検定の結果、「関係深化」得点において女性の方が有意に得点が高かった。

(4) 妥当性の検討

構成概念妥当性を検討するために、同性友人関係尺度と特性シャイネス尺度、親和動機尺度との相関係数を算出した。結果を Table 3 に示す。

その結果「関係深化」下位尺度は親和動機得点の「親和傾向」と有意な中程度の正の相関、特性シャイネスと有意な弱い正の相関がみられ、「関係拡大」下位尺度は特性シャイネスと有意な中程度の負の相関、「親和傾向」と有意な弱い正の相関がみられた。一方で、拒否不安

Table 1 同性友人関係尺度 (12項目) の因子パターン行列 (プロマックス回転)

項目	F1	F2	共通性
F1: 関係深化 ($\alpha = .84$)			
37. 友人には自分の心を打ち明ける	.81	.09	.72
1. 友人にすべてをさらけ出すのは危険である	.73	-.16	.49
11. 友人には全てを見せたい	.68	-.08	.44
29. 友人とは本音で話さない方が無難だ	.66	-.06	.42
23. 友人にはありのままの自分は出せない	.60	-.01	.36
59. 私は他の人よりも深く友人と付き合ってる方である	.54	.20	.39
53. 友人によく悩みを相談する	.52	-.02	.27
33. 友人にはすべてを見せて欲しい	.46	.12	.26
41. 友人に真剣な議論を持ちかけることがある	.40	.13	.20
F2: 関係拡大 ($\alpha = .72$)			
55. 初対面の人ともすぐに仲良くなれる	-.09	.86	.70
57. 私は他の人よりも友人が多い方である	.04	.78	.62
31. 一度でも会ったことがある人は誰でも友人である	.06	.42	.20
因子抽出法: 主因子法			
	因子間相関	F1	
	F2	.31	-

Table 2 同性友人関係尺度の男女別の平均値、標準偏差、および t 値

	男子 (N = 74)		女子 (N = 79)		t 検定
	M	SD	M	SD	
関係深化	2.97	0.85	3.39	0.71	-3.34**
関係拡大	2.48	0.97	2.73	0.90	-1.16

** p < .01

Table 3 同性友人関係尺度とシャイネス尺度・親和動機尺度の相関

	同性関係深化	同性関係拡大
特性シャイネス	-.25**	-.68**
親和傾向	.60**	.32**
拒否不安	.02	-.05

** p < .01

とはいずれの因子も有意な相関がみられなかった。以上から、本尺度は十分な妥当性を備えていることが示された。

2. 異性友人関係尺度

(1) 因子分析

回答の偏り(平均値 ± 1SD)を示す天井効果・床効果が見られず、項目全体相関が.30以上の15項目に対して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況と解釈可能性から3因子を採択し、因子負荷量が.35以上の項目で二重寄与していないものを手掛かりとして各因子を解釈した。分析の際には男女別に分析した場合も抽出される因子や各因子に対して負荷量の高い項目は男女いずれも男女を込みにした分析の結果とほぼ同じであったため、男女を分けずに分析を行った。結果をTable 4に示す。

第1因子は項目38(友人には自分の心を打ち明ける)や項目12(友人には全てを見せたい)など自分のことを友人に知ってもらいたいという傾向を示す項目からなるため、友人関係における「自己開示」の因子と命名した。第2因子

は項目56(初対面の人ともすぐに仲良くなれる)や項目8(あまりよく知らない人にでも会えば挨拶する)など、親しくない知り合いとも接触を持つとする傾向を示す項目からなるため、友人関係の「関係拡大」の因子と命名した。第3因子は項目34(友人にはすべてを見せて欲しい)や項目20(友人に隠し事をされたくない)など友人のことを知りたい傾向を示す項目からなるため、友人関係における「被自己開示願望」因子と命名した。3因子間の相関は.09-.48であった。

(2) 信頼性の検討

下位尺度ごとに得点の平均値を求め下位尺度得点とした。各下位尺度のクロンバックの α 係数をTable 4に示す。いずれの下位尺度においても、 $\alpha = .73-.81$ と高い内的整合性が認められ、本尺度は十分な信頼性を備えていることが示された。

(3) 本尺度の基本統計量と性差に関する検討

本尺度の下位因子得点に関する基本統計量とt検定による男女差の検討をTable 5に示す。

Table 4 異性友人関係尺度(12項目)の因子パターン行列(プロマックス回転後)

項目	F1	F2	F3	共通性
F1: 自己開示 ($\alpha = .76$)				
38: 友人には自分の心を打ち明ける	.77	-.04	.03	.60
30: 友人とは本音で話さない方が無難だ	.57	-.12	-.03	.26
12: 友人には全てを見せたい	.56	-.17	.30	.48
24: 友人にはありのままの自分は出せない	.56	.11	-.16	.33
2: 友人にすべてをさらけ出すのは危険である	.53	-.04	.05	.28
F2: 関係拡大 ($\alpha = .73$)				
56: 初対面の人ともすぐに仲良くなれる	-.02	.82	.04	.67
58: 私は他の人よりも友人が多い方である	.05	.74	-.07	.58
8: あまりよく知らない人にでも会えば挨拶する	-.06	.60	-.01	.33
50: 知り合った人とはすぐに連絡先を交換する	-.20	.47	.21	.19
F3: 被自己開示願望 ($\alpha = .81$)				
34: 友人にはすべてを見せて欲しい	.00	.02	.84	.71
20: 友人に隠し事をされたくない	-.13	.06	.80	.58
46: 友人には本音で話して欲しい	.18	.06	.63	.54
因子抽出法: 主因子法				
	因子間相関	F1	F2	F3
	F2	.48	-	
	F3	.43	.09	-

両側検定によるt検定の結果、「被自己開示願望」得点において女性の方が有意に得点が高かった。

(4) 妥当性の検討

構成概念妥当性を検討するために、異性友人関係尺度と特性シャイネス尺度、親和動機尺度との相関係数を算出した。結果を Table 6 に示す。

その結果「自己開示」下位尺度では親和動機得点の「親和傾向」と有意な中程度の正の相関、特性シャイネスと有意な弱い正の相関がみられ、「拒否不安」とは有意な相関がみられなかった。また、「関係拡大」下位尺度は特性シャイネスと有意な中程度の負の相関、「親和傾向」と有意な弱い正の相関、「拒否不安」と有意な弱い負の相関がみられた。そして、「被自己開示願望」下位尺度は「親和傾向」と有意な中程度の正の相関、特性シャイネスと有意な弱い負の、「拒否不安」と有意な弱い正の相関がみられた。

考 察

本研究では大学生の同性の友人関係と異性の友人関係の構造を測定する尺度を作成し、その

信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

同性友人関係尺度は因子分析の結果、「関係深化」因子と「関係拡大」因子の2因子から構成されていることが示された。尺度の信頼性については、 α 係数を算出し、十分な内的整合性を備えていることが確認された。また、妥当性に関しては友人関係において相手とより親密になろうとする傾向を表す「関係深化」因子と人と一緒にいたい気持ちを表す親和動機尺度の「親和傾向」因子が中程度の正の相関、色々な人と友人になろうとする傾向を表す「関係拡大」因子と内気や引っ込み思案の個人特性を表す「特性シャイネス」が負の中程度の相関を示した。このことから本尺度は、妥当性についても十分に備えていることが確認された。本尺度の「関係深化」因子と「関係拡大」因子はそれぞれ、落合・佐藤（1996）が同性の友人関係について二次因子分析を用いて示した「人との関わり方に関する姿勢」と「自分がかかわろうとする相手の範囲」に対応するものであると考えられ、先行研究の知見が確認されたといえる。

一方、異性友人関係尺度は因子分析の結果、「自己開示」因子、「関係拡大」因子、「被自己開示願望」因子の3因子から構成されていることが確認された。尺度の信頼性については、 α 係数を算出し、十分な内的整合性を備えているこ

Table 5 異性友人関係尺度の男女別の平均値、標準偏差、およびt値

	男子 (N = 74)		女子 (N = 79)		t 検定
	M	SD	M	SD	
自己開示	2.82	0.80	3.03	0.80	-1.60
関係拡大	2.50	0.79	2.44	0.94	0.47
被自己開示願望	3.37	1.09	3.70	0.90	-2.03*

* p < .05

Table 6 異性友人関係尺度とシャイネス尺度・親和動機尺度の相関

	異性自己開示	異性関係拡大	異性被自己開示願望
特性シャイネス	-.37**	-.63**	-.16*
親和傾向	.51**	.22**	.55**
拒否不安	-.14	-.20*	.31**

* p < .05, ** p < .01

とが確認された。また、妥当性に関しては友人に自分のことを知ってもらいたいという「自己開示」因子と友人のことを知りたいという「被自己開示願望」因子は親和動機尺度の人と一緒にいたいという傾向を表す「親和傾向」因子と中程度の正の相関を示し、色々な人と友人になろうとする傾向を表す「関係拡大」因子と内気や引っ込み思案の個人特性を表す「特性シャイネス」が負の中程度の相関を示した。また「関係拡大」因子と「被自己開示願望」因子は親和動機尺度の他者からの拒否に対する恐れを表す「拒否不安」因子とそれぞれ弱い負の相関と正の相関を示し、有意ではなかったものの「自己開示」因子とも「拒否不安」は弱い負の相関を示した。同性友人関係尺度の下位尺度において「拒否不安」はほぼ無相関であったのに対して、異性友人関係尺度の各下位尺度とこのような関連がみられたのは「異性不安」(富永, 1993)に示されるように異性の友人関係は同性の友人関係とは異なり、不安を生じないような気軽なものではないためであると考えられる。以上から本尺度は、妥当性に関しても十分に備えていることが確認された。

また、t検定の結果から同性との友人関係においては女性の方が男性よりも友人関係においてより相手と親しくなろうとする傾向があることが示された。これは、女子は青年期のどの段階においても同性の友人と密着した関係を持っており、青年期の男子は同性の友人とは親密というより内面を隠したつきあい方をしているという長沼・落合(1998)の結果と整合するものである。一方で異性との友人関係においては女性の方が男性よりも相手のことをより深く知りたいため相手の自己開示を望む傾向があることが明らかになった。新見ら(2004)の研究においても大学生の友人関係において女性は男性よりも友人からの自己表明を望むことが明らかになっており、青年期の女性は男性よりも相手のことを知りたいと思う傾向があるのだろう。

本研究では同性との友人関係を測定する尺度と異性の友人関係を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行った。因子分析の

結果から同性の友人関係と異性の友人関係が異なる構造を持っていることが示され、いくつかの下位尺度において性差がみられた。これらのことから友人関係を測定する際には同性の友人と異性の友人とは異なる尺度を用いる必要性が確認されたといえる。

今後は本尺度を用いて、同性の友人関係と異性の友人関係の構造と様々な要因との関連を検討していく必要があるだろう。また、異性の友人関係において、異性不安や対人行動が学校段階で異なっていることが示されており(大井・宮本, 2009)、異性の友人関係の構造は学校段階によって異なる可能性がある。本研究では大学生を対象に尺度を作成したため、他の学校段階、発達段階においても本尺度が適用可能か、検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 相川充(1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究, 心理学研究, 62, 149-155.
- 遠藤利彦(1999). 心理的離乳 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 (pp. 461) 有斐閣.
- 松井豊(1990). 友人関係の機能 “背年期における友人関係” 齊藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハンドブック (pp. 283-296) 川島書店.
- 長沼恭子・落合良行(1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 新見直子・松尾紗織・前田健一(2004). 大学生の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 広島大学心理学研究, 4, 139-149.
- 落合良行・佐藤有耕(1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 落合良行・竹中一平(2005). 青年期の友人関係研究の展望 - 1985年以降の研究を対象として

- －筑波大学心理学研究, 28, 55-67.
- 岡田努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 大井由莉菜・宮本正一 (2009). 青年期における異性との友人関係の発達 岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 58, 177-186.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 杉浦健 (2000). 2つの親和動機と対人疎外感との関係; その発達的变化 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 富重健一 (1993). 青年期における「異性不安」研究の現状と今後の課題 東京大学教育学部紀要, 33, 97-105.

謝 辞

本論文は第1筆者が2009年度に慶応義塾大学環境情報学部にて提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものです。卒業論文の執筆にあたってご指導いただきました、慶応義塾大学環境情報学部 濱田庸子教授・渡辺利夫教授に記して感謝致します。